西洋建築史第6回

戦争の建築－垂直式防御と稜堡式築城術

中島 智章

序.建築家と軍事

●第1書(都市の防御)と第10書(都市攻撃・防御のための機械)

→「都市を護る建築家」という理想像を示して全書をしめる

←ウィトルウィウスはユリウス・カエサル麾下の軍事技師だったといわれている。

1.垂直式防御

●都市を囲う市壁(city wall)→交通の要衝に発展した平野の町

＋防御を優先して山上に築かれた町

Aurelianus帝の城壁(Roma)→廃墟となったインスラや水道橋の構造体を利用した総延長20kmの市壁、30m毎に塔

Theodosius II 帝の城壁(Constantinopolis)→堀と塔を備えた二重城壁

→Constantinos XI帝治下に陥落(1453)

●カルカソンヌ、マーストリヒト、アーヘン、ナミュール、バンシュ、トゥルネ、ブリュッセル、メヘレン、ルーヴェン

●要塞建築→市壁の一画を占める都市防御のための城塞(citadelle)

＋山上など軍事上の要衝に築かれた城塞

主塔：donjon、胸壁：parapet＋矢狭間、城壁(幕壁：courtine, curtain wall)＋塔＋堀、城門＋跳ね橋＋側塔(＝châtelet)

10世紀末～：木造、土盛→切石を積んだ組積造

＊聖堂建設、高度な組積造技術、石材加工技術、十分な石材供給

●フランドル伯居城(ヘント)、ブイヨン城、ルーヴル城、バスティーユ城、ヴァンセンヌ城(パリ)

教皇宮殿(アヴィニョン)、スフォルツァ城(ミラノ)、エステ城(フェッラーラ)

2.アヴィニョン教皇宮殿

●教皇権の絶頂そして転落

グレゴリウス7世対ハインリヒ4世(カノッサの屈辱、1077)

インノケンティウス3世対ジョン欠地王

ボニファティウス8世対フィリップ4世(アナーニ事件、1303)

●アヴィニョン捕囚(1308-77)＝教皇のバビロン捕囚

教権に対するフランス国王の影響力が高まり、フランス人枢機卿が増加

クレメンス5世(1305-14)→ヨハンネス22世(1316-34)→ベネディクトゥス12世(1334-42)→クレメンス6世(1342-52)

→インノケンティウス6世(1352-62)→ウルバヌス5世(1362-70)→グレゴリウス11世(1370-78)

●教会大分裂(1378-1417)

ローマとアヴィニョンに二人の教皇が並び立つ(1409年からはピサにも教皇が立つ)

●教皇宮殿(1335～55頃)

中世最大の宮殿建築にして城塞建築

●ゴシック様式の世俗建築への適用

①**pointed arch**＋②**rib vault**＋③**flying buttress**

→世俗建築でも①と②が盛んに用いられた

3.稜堡式築城術の誕生

●Constantinopolis(コンスタンティヌポリス)の陥落(1453)

フランス国王Charles VIII, Louis XII, François Ier(er)によるイタリア遠征(1494～)←火兵

●平面：半月堡(demi-lune(ドゥミ・リューヌ))、稜堡(bastion)、幕壁(courtine(クールティーヌ), curtain wall)

→「五稜郭」のような角の突き出た多角形平面

→十字砲火、側面射撃を可能にする

●断面：斜堤(glacis(グラシ))、掩体道(chemin couvert(シュマン・クーヴェール))、外岸壁(contrescarpe(コントルスカルプ))、堀(fossé(フォセ))、内岸壁(escarpe(エスカルプ))、胸壁(parapet)

→垂直式防御の「高さ」に対して、稜堡式築城術の「厚み」

→敵側からみたらこんもりとした森にしかみえない

←高い塔や城壁は大砲の的にしかならない

●国境地帯の主要都市を中心に、都市は街区よりも広大な面積を要する都市防御施設で護られる

→非常に大がかりなので一握りの大国でしか建設・維持できない

→パルマ、イーペル、リール、ナミュール、リエージュ、ルクセンブルク(リュクサンブール)、ベルフォール

●軍事計画都市←敵対する勢力間の版図の変化

ex)ピレネー講和条約(1659年11月7日)とシャルルロワ要塞の建設

＊パルマ・ノーヴァ、フィリップヴィル、マリアンブール、シャルルロワ、ヌフ・ブリザック

4.軍事建築の独立

●中世シャトー(château)＝騎士の居館＋防御拠点

→近世シャトー＝田園地帯における王侯貴族の居館

●中世シャトーの防御拠点としての側面が独立

→シタデル(citadelle)＝都市防御のための拠点要塞

フォルティフィカシオン(fortification)＝都市防御システム

フォール(fort)＝要塞

5.ヴォーバンの国境戦略

●「国境線」の出現

←Vaubanの「縄張：pré carré(プレ・カレ)」戦略と「鉄帯：ceinture de fer(サンチュール・ドゥ・フェール)」戦略

→都市を結んで防衛線を

ex)北東部国境→イーペル、メネン、リール、トゥルネ、ヴァランシエンヌ、モブージュ、フィリップヴィル、ディナン

サントメール、エール、アラス、ドゥエ、カンブレ、ランドルシー、マリアンブール、ロクロワ

＊VAUBAN(ヴォーバン)、Sébastien LE PRESTRE(本名セバスティアン・ル・プレストル), Marquis de (1633-1707) vs Menno van COEHOORN(メンノ・ファン・クーホールン)(1641-1704)

●Louis XIV(ルイ14世)治下のパリ非武装化(1670)

→セルウィウスの城壁を撤去したカエサルの偉業の再現を狙う

6.都市防御システムと都市の膨張

●Napoléon Ier(ナポレオン1世)の国民皆兵→国境辺の攻囲戦↓

→パリ再武装=l'enceinte Thiers(1841-1929)、稜堡×94

●Henri-Alexis BRIALMONT(アンリ・アレクシス・ブリアモン)(1821-1903)の環状配置要塞群(リエージュ、ナミュール、アントウェルペン)

←火砲の発達